

2002 年夏休み友情のレポーター フィリピン取材レポート

田中 亜実 (青森県 / 当時 15 歳)

報告書

フィリピン(2002 8.5 ~ 8.11・夏)

応募動機

以前からボランティアに対し強い関心を抱いていた私は、中学の総合学習で「中学生の私にもできること Part 1」と題し、中学生の私にもできるボランティアを調べ勉強しています。1年生では「障害者に優しい街づくり」をテーマに、障害者の視点にたつて市内の道路・交通事情やデパート・スーパー等の問題点を追求、2年生では「中学生の私にもできること」と題し、実際に養護施設(知的障害児・肢体不自由児)を訪問、子供達と一緒に過ごす体験をしてきました。中学生生活最後となった今年は、市内という小さな枠にとどまらずもっと広い視野にたつて物事をとらえたいと考え、修学旅行を利用し国境なき医師団の事務局を訪問、いろいろ勉強させて頂き、その時この「こどもレポーター」の事を知りました。ボランティアは、私にとって一生のテーマだと思っています。この機会に、見知らぬ国の日本とは異なる状況下での生活を余儀なくされている子供達の現状を、自分の目で見て、肌で感じ、彼らを理解し、勇気づけられたらと考え応募しました。

彼らは一体どんな生活をし、何を考え、何を求め、どんな夢を抱いているのでしょうか。現地では、どんな援助活動がなされているのでしょうか。そして、私達に何ができるのでしょうか。また、何をしなければならぬのでしょうか。14歳の視点でいろいろ取材し、是非、その現状を一人でも多くの人々に伝え一緒に考えていきたいと思いません。

取材地

1. パヤタスごみ捨て場

若者の家からスラム街を歩いて車で約20分、マニラ北部の臨海部にこの大きなごみの山(パヤタスごみ捨て場)は2つ並んでありました。高さはどちらも105mぐらいで、この山が全てごみからできているのかと思うと、そのあまりの大きさに唖然としてしまいました。メタンガスの自然発火でいつも煙が出ているので、その山は現地の人達に「スモークマウンテン」と呼ばれていました。朝から大雨だったのに、パヤタスごみ捨て場に着いたらパッと雨が止みました。長靴にはきかえて、さあ、いざ山登り!ひどい悪臭とごみに群がるたくさんのハエ。それはまるで真っ黒なアスファルトの道路のようで、私達がそばを歩くと一斉に飛び立ち私を驚かせました。立ち止まるとハエが私の足にたくさん止まるので、私は一生懸命歩きました。うじがわいてい

るのも、ゴキブリを見たのも私にとって生まれて初めてでした。信じられないことに、そんな中で山の斜面のあちらこちらには壊れたビーチパラソルがたてられ、多くの人々がそこで生活していました。そのあまりの人の多さに私はびっくりしました。2つの山のうち、現在、1つは閉鎖されていました。(とは言え、現在も人は住み生活していましたが...)山が崩れ、300人もの人が生き埋めになり死んだからです。そういえば、この山からはときどき腐った子供の死体が出てくるそうです。それは、ごみを捨てに来たトラックにひかれたり、ブルドーザーに巻き込まれて死んだ子供や、ごみとして捨てられた赤ちゃんです。フィリピンでは生後一ヶ月の間に約3割の赤ちゃんが死に、そんな赤ちゃんをごみとして捨てざるを得ない親がたくさんいるからです。

このごみ山で、私はアイリンという私と同じ14歳の少女と出会いました。彼女は朝6時から夕方6時まで、学校にも行かず毎日一人、この山で鉄やガラスびん、ペットボトル、プラスチック、空き缶、ダンボールなどを拾いお金に代えていました。ガラスびんとペットボトルはそれぞれ1本5ペソ、他は1kg1ペソになるそうです。彼女は1日約100ペソ・日本円で250円(多い時は300ペソ)稼ぎ、それをすべてお母さんにわたしています。100ペソ稼ぐということは、100kgのごみを集めそれを下まで運び、さらにそれをきれいに洗わなければならないということです。もちろん昼食はこのごみの山から探して食べています。私は思わず「ごみの山や、この仕事はいやじゃないの?ここから出たくないの?」と彼女に尋ねました。すると彼女は、「この山もこの仕事もいやじゃないよ。だって、私たち家族が生きていくための基盤ですもの。ここで働く時間は私にとって大切だから離れたくないわ。」と微笑みながら答えてくれました。彼女の夢は学校へ行くこと。なぜなら学校を卒業するときちゃんとした仕事につけ家族を養えるから。彼女の一番欲しい物は学校を卒業すること。一番大切にしているものは家族以外にはない。家族みんな(10人兄弟だが姉達は結婚しているかお手伝いさんをしているので、現在は両親と兄弟5人、計7人で生活している。)が食べるのに困らないこと、それが彼女の幸せ。彼女の笑顔は輝いていました。

東洋一のスラム街に住み、彼女は8歳からこの仕事をしています。同じ時代に生きているのに、生まれた場所が違うだけでどうしてこんなにも生活が違うのでしょうか。三食食事をする事も、学校に行く事も私達日本の子供達にとってはあたりまえのことです。でもフィリピンの子供達にとっては夢なのです。ごみ捨て場が生活の基盤なんて、何か悲しくなります。同じ地球の子として、私が彼らにしてあげられることはないのでしょうか。

山登りは、数台のトラックが頂上付近にいて危険だということで、頂上手前10m位のところで中止し、私たちは下山しました。

2. 学校

公立の小学校(Commonwealth Elementary)と、夜間の学校(Miriam Collage)の2校を訪問しました。

小学校では一年生と四年生の教室を訪れ、一緒に行った周平君はその天才的な技の

「切り絵」で、私は折り紙を折ったり、「国境なき子どもたち」さんが用意して下さったキーボードでフィリピンの曲「アナ - ク」を弾き、子供達と親睦をはかりました。アナ - クを弾いた時、「若者の家」の子(名前は分かりません。ごめんなさい)が私のキーボードにあわせ歌ってくれたり、四年生の男の子が、折り紙を使いチューリップを作り私にくれました。(彼らの優しい気持ちに感謝!)そうです、この小学校にも「若者の家」の子供が通っているのです。彼は「若者の家」に来る前は、墓地に住むストリートチルドレンでした。しかし、「若者の家」に来てから真剣に将来の事を考え、自ら学校へ行きたいと言い、今年の六月に一年生になったそうです。小学生に混じって、15か16歳になる子が一緒に勉強している姿に私は感動しました。ちなみに、彼はクラスの中でも人気者でとても楽しそうでした。自分の夢に一步でも近づくため、卒業するまで挫折しないで頑張りたいと心から思いました。

夜間の学校では、小学校のときのような親睦を持つための特別な時間はありませんでしたが、集会に参加させて頂いたり、授業を参観させて頂きました。クラスは個人個人のレベルにあわせて編成されていました。「若者の家」の子供達も何人かいて、皆、真剣な表情で勉強していました。私は、日本とは違い夜間にこのような学校があることにとても驚きを感じましたが、同時に、このような学校があることをとても嬉しく思いました。日本では教育を受ける事が憲法で保障されていますが、フィリピンではどうなっているのでしょうか。学校に行きたいと思っている子が、こんなにもたくさんいるのに…。一人でも多くの子供達に、勉強する機会を与えてあげたいと思いました。

みんな運命に負けるな!頑張れ!!こっそり、かわいいピンクの野の花を一輪摘んで私にくれた「若者の家」の子(名前が分かりません。ごめんなさい)ありがとう!!!

3 . 墓地

二日続けて、墓地で生活しているストリートチルドレンの取材に行きました。彼らは、お棺を安置するために作られた建物の鉄格子をボロボロで覆い、お棺をベットやテーブル代わりに生活していました。お棺とお棺の間の通路には、ボンドを吸った後のビニール袋や、空ビンが散乱していました。これだけ聞くと、暗くて恐ろしい、人に危害を加えるような悪い子供達を想像するかもしれませんが、少なくとも私が出会った子供達は、皆、明るく元気で心優しい子供達ばかりでした。彼らは「I am street children」と笑顔で私に話しかけ、私がカメラを向けると嬉しそうにポーズをとりました。

一日目、国境なき子どもたちの現地スタッフが子供達の健康チェックをした後、私達は彼らに一切れのピザとジュースを配りましたが、用意した30人分はあっという間になくなり、子供達全員にあげることはできませんでした。そんな時、何を思ったのかピザを手にすることができた一人の小さな男の子が、私に、「半分いかが?」と声を掛けてくれたのです。普段お腹いっぱい食べてるわけではないのに、私に半分わけてくれるというのです。私は驚いたと同時にとても嬉しい気持ちになりました。また

その日、一人の男の子が家族で生活しているお宅を案内してくれました。6人家族のお宅は、ちょうど食事中でした。たき火の上に拾ってきた扇風機の傘を置き、それに重ねられた鍋でご飯が炊かれていました。おかずはサンマに似た、しかしそれより小さい焼魚が2匹。各自がご飯と魚を手で取り、それをお棺の上で混ぜて食べていました。6人で食べるには充分とはいえない量なのに、ここでも私に食事を勧めてくれました。とても申し訳ないので、「お腹いっぱいです。」と言って断りました。それに、あの汚れて少し黒くなったご飯は、私には食べられませんでした。

2日目は、朝6時にホテルを出て墓地へ向かいました。墓地へ着くと私達は、すぐに彼らと一緒に公衆浴場へ行きました。公衆浴場では、ひとりひとりに新しい石けんとタオル、ショートパンツを渡しました。シャワーを使って全身を洗うと10ペソ、くまれているお水を使うと3ペソ、トイレは2ペソでした。きれいになった子供達を、ジプニ - に乗った「若者の家」の子供達数人が迎えに来てくれました。彼らもまた、以前、この墓地に住んでいた子供達です。(私にはとても信じられませんが…) 私達はそれぞれ、ジプニ - やワゴン車に乗って近くの公園へ遊びに行きました。ジプニ - の中で、集英社さんから頂いた真っ白で真新しいTシャツに着替えた子供達は、とても嬉しそうでした。中には、その新しいTシャツがよほど大切なのか、新しいTシャツの上にそれまで着ていた古い汚れたTシャツを重ねて着ている子もいました。どの子も物をととても大切にします。皆の嬉しそうな顔を見ていると、私まで嬉しくなりました。公園ではゼクセル、ジョンジョン、レイモンド、ブライアン、ベルギーと、「若者の家」の子供達が中心になり、綱引きやリレー、小麦粉の中からノペソを口で探すゲーム、日本のゲーム(ハンカチ落とし)フィリピンのゲーム(名前は分かりません。せんだみつおゲームのようなもの)を、時間がたつのも忘れるほど夢中になってやりました。本当に本当に楽しくて、私は言葉が通じなくても心が通じたような感じがしました。彼らから、たくさんの元気と優しさをもらいました。

彼らと別れたあと、私は、自問自答していました。皆に、今より幸せになって欲しい。皆を、どうにかしてあげたい。私に、何ができるのだろうか…。

4 . 若者の家

フィリピン到着のその日、「若者の家」で私達5人の歓迎パーティーをしてくださいました。夜間の学校に子供達も帰って、35人全員がそろった午後9時過ぎ、パーティーは始まりました。周平君は素晴らしい切り絵を、私はキーボードでフィリピンの曲「アナ - ク」を弾きました。もちろん、他の曲も用意していました。ショパン、ベートーベン、モーツァルト、チャイコフスキー…など。でも、「若者の家」の子供達はキーボードのボタンが気になるらしく、とても何曲も弾ける状況ではなくなり、壊されてはいけなからしめるように指示が出て、結局、最後まで弾けたのは1曲だけでした。でも私が「アナ - ク」を弾き始めたとき、自分達の部屋から本を持ってきて、大きな声でキーボードにあわせ歌ってくれ私はとても感激しました。みんなとっても元気でfriendlyな子供達ばかりで、この子供達が本当に元ストリートチルドレン?と、疑い

たくなりました。(刺青をしている子は多いけど・・・)とにかくその日はダンスを習い、曲にあわせ何回も踊ってしまいました。疲れたけど、とても楽しいパーティーでした。それにこの日、ゼクセルからプロミスリングをもらいました。私のために、6色の毛糸を使って編んでくれたものです。ここの子供にとって、6色の毛糸を買うお金はとても重要なはずです。私の宝物として、ずっと大切にしようと思いました。

また9日には、「若者の家」から4～5時間離れた海へみんなで行きました。長い時間ジブニに乗ったので、私の顔は排気ガスで真っ黒になってしまいました。これもいい経験！午後6時から泳ぎ始めました。「若者の家」の子供達は、あまり泳ぎの得意でない私に浮き輪を貸してくれたり、泳ぎを教えてくれたりと、とても親切にしてくれました。この日はここで1泊し、次の日は朝から泳ぎました。そして帰る前には、ビーチで表彰式をしました。「学校を1日も休まなかったで賞」「数字が1番良くできたで賞」「単語をよく覚えたで賞」「服装が1番良かったで賞」など、たくさん賞があり聞いていて楽しくなりました。賞品は頭につけるジェル！子供達は大喜びでした。子供達はグループにわかれているので、結局皆が賞品をもらえる仕組みになっています。これはとてもいい考えだと思いました。

ところで、「若者の家」の子供達の9割は、もと墓地に住んでいたストリートチルドレンで、残りの1割は、貧しい家族の子供か離散家庭の子供です。現在は35人います。子供達はここへ来て生まれて初めて学校へ通ったり、将来への希望をもったりしているのです。スタッフの人達はここで勉強を教えたり、悩み事の相談を受けたりしています。以前、自分自身がストリートチルドレンだったというスタッフもいます。ここでの決まりは2つ。1つは、シンナー(ボンド)を持ち込んだり吸ったりしない。2つ目は、外出する際、行く時と帰った時には必ずスタッフに告げる。わずかこれだけです。新しい決まりは、気がついた時に気がついた人が提案し、スタッフを交え皆で話し合い決めるそうです。(例えば、朝は挨拶しようとか・・・)私は、子供達の人格や気持ちが尊重されていて、すごくいい仕組みだと思いました。またスタッフは、路上や墓地で生活している子供達を定期的に訪れ声を掛けては、「若者の家」の存在を知らせています。そして、いつでも遊びに来るように勧めているのです。もちろん、健康チェックや人数の確認もします。「若者の家」は子供達が自由に入出りでき、食事をとったり、シャワーを浴びたり、洗濯をしたりと、自分の家のように心や体を休められる場所になっています。子供達にとっては、生まれて初めて味わう家庭のような存在だと思います。ストリートチルドレンや貧しい家族の子、離散家庭の子にとって、いわば「いやしの空間」、それが「若者の家」だと思います。もうすぐ、2軒目の「若者の家」ができる予定だと聞いています。私は、私が出会った多くの子供達のために、1日も早くこの家ができて欲しいと願っています。

5. 取材を終えて

最初に、私にとって生まれて初めての海外、それをこのように一生忘れられない有意義なものにして下さった国境なき子どもたちの皆さんに感謝したいと思います。

2002年8月5日、ストリートチルドレンの取材のために私はマニラの地に立っていました。マニラは私の故郷「弘前」とは違い、じっとしていると溶けてしまうのではないかと思うほどの暑さでした。街ではタバコ売りの子供が、タバコを売っていました。タバコを1本でも買ったお客さんには、ライターで火をつけてあげていました。大きなスポンジとバケツを持った子供や大人がたくさん歩いていて、何をするのかと思って見ていると、頼みもしないのに、あっという間の速業で止まった車の窓をふきお金をもらっていました。道路の真ん中では、車のタイヤ交換をしている人がいました。窓のない車(ジプニ-)も走っていました。何もかも初めてで、びっくりする光景でした。

でも、一番心に残ったのはごみの山を頼りに生きている人々、特に、家族のために一生懸命働く子供達の姿と、墓地で生活する子供達の笑顔や優しさ、「若者の家」で自分を顧み、自分の将来をみつめ、一歩前向きに力強く歩み始めている元ストリートチルドレンと呼ばれた子供達。私とあまり年がかわらないのに、私の出会った子供達は、みんな明るく、元気で、心優しい子供たちばかりでした。私はフィリピンの子供達からたくさんのことを教えてもらいました。家族を大切にすること、力強く生きること…etc 私が出会った多くの子供達の笑顔を、私は決して忘れることはないでしょう。

日本はフィリピンと比べると、生活に必要なものがあふれています。でも、心は…?!

この際、私も今一度自分を振り返ってみようと思います。そして、たくさんのことを教えてくれたフィリピンの子供達に、今度は私が何かしたい、何かしなければ、私に何ができるだろう…と考えています。中学生の私がフィリピンの子供達のためにしてあげられることは、ほんの少ししかありません。でも、ほんの少しのことでもしなければ何も始まりません。とりあえず、ありのままのフィリピンの子供達の姿を、1人でも多くの人に伝えることから始めようと思っています。いつかまたフィリピンに行き、皆に会える日を心から願って…。

貴重な支援金の一部を使い、こんなにも素晴らしい体験をさせて頂きありがとうございました。

2002年 夏休み友情のレポーター 田中 亜実

2002 年夏休み友情のレポーター フィリピン取材レポート

山本 周平 (神奈川県 / 当時 16 歳)

若者の家

ぼく達が一日目に訪れた所でぼく達が一番よく訪れた、場所。約三十五人の子ども達がここで生活をしている。年齢は十五才～二十才ぐらい、みんな日に焼けてニコニコよく笑う。ぼく達によくわからないタガログ語や英語で熱心に話しかけてくる。ストリートチルドレンという過去を持つかれらが、正直言ってこんなに明るいとは思ってもみなかった。しかし、かれらは墓に住んでいたり、路上で生活していたり、またはゴミの山で暮らす家族が養えなくなって引きとられたりした子ども達だ。しかし彼らは旅の間全くそのことを感じさせなかった。よけいな気づかいはかえってよくないのかもしれない。かれらに旅の間中親や過去の事を聞くことはついになかった。その時は感情表現が素直なのだと思ったけどもしかしたらそのことを笑うことで忘れていたのかも…。オシャレが大好きでバスケットボールに夢中で、いつでも笑顔のすてきな子ども達。しかし、ちゃんと親がいて、食べ物に不自由せず、おこづかいもたくさんもらい、ケータイも大部分が持っている、そんなぼくら日本の子どもにもかれらと同じように笑える子は少ないと思う。しかし、やっぱりかれらも、日本のぼくらも同じ子どもだということだ。かれらはとても楽しそうに学校にかよう。かれらは勉強できることに喜びを感じているようにみえる。かれらの大部分は学校に行きたくても行けない子どもだった。日ごろから義務教育になれているぼくらにとってその気持ちは理解できないと思う。現にぼくもはっきりいってあまりかれらの気持ちはわからない。しかし、いそいそと車に乗り込み学校に向かう彼らはとても幸せそうだ。車の中で僕は彼らの笑顔から勝手にそう思っている。同じ15才だというハロルド君と友達になった。彼は高校生ではない。小学4年生だ。でもはずかしながら続けているのやはり勉強が好きだからだと思う。彼は同じ15歳だが僕より背が全然小さかった。ちゃんと大きくなれることも、僕たちが恵まれていることの一つだと思う。ちなみに17才のレイモンド君や24歳のソーシャルワーカーの人も僕より低かった。別に苦労もせずただ背ばかりが大きくなった。なんかとてもはずかしい。若者の家のビッグママ(若者の家のすべての事務を担当している。)アグネスさんはこの仕事をしていてよかったと思うことは、「彼らが喜んで学校に行くのを見ること」。逆に悲しいことはというと、「彼らがまた墓地に戻りシンナーを吸う生活に戻ること」だそうだ。

この若者の家で生活している子ども達、彼らはとても明るく、僕たちを迎えてくれた。常に笑顔だ。彼らが過去につらい経験をしたことは全く感じさせなかった。

現地スタッフのユウコさん。フィリピンには来てまだ日も浅いらしいが、もとはバングラディッシュにいたらしい。彼女は高校生のときにかのマザーテレサの言葉に動かされこの仕事について感心を持った。熱心でとても優しい人だった。若者の家の会計を担当。

若者の家のルール 若者の家でシンナーを吸わない。出かけたり帰ったときは連絡する。

若者の家のソーシャルワーカーの中にはもとストリートチルドレンもいる。彼らはこの部屋で勉強を教えたり、若者の家の様々な仕事をしている。

墓地でくらす子ども達

フィリピンに来て二日目僕はマニラの墓地に行った。フィリピンは交通の便がすごく悪い。移動するのにすごく時間がかかるのだ。なぜ墓地にぼく達はやってきたかというところの墓地にはたくさんのストリートチルドレンが生活しているからだ。中には棺おけで眠る子どももいるらしい。着くとすぐたくさんの汚い子どもがワラワラとでてきた。服はボロボロで泥だらけの子もいた。罰当たりだとは思いますが、墓の上を踏みしめながら墓から墓を渡り歩く。僕は自称19歳の女の子(自分では男だと言っていたが)と仲良くなった。やはりとても明るくたくましい子だった。しかし八エが飛びガラスの破片の落ちていた道を裸足でかけていく姿は明るいだけではない何かを感じる気がする。とても小さい子ばかりでどうやって生活しているのだろうと思った。自分の境遇を忘れてためか、シンナーやボンド(シンナーが含まれる)を吸っているらしい。そういえばあたり一面にオレンジ色のボンドが入った袋が散らばっていた。こんな小さな子達がシンナーを吸うとは!! フィリピンではシンナーの規制がゆるく彼らにも手軽に買えてしまうのだ。日本で僕にとってシンナーはあまり近い存在ではなかった。しかしここに来て僕のすぐ隣にシンナーがある気がした。しかし彼らにはちゃんと夢もあり望みもある。彼らに聞くと一番多かったのは勉強をしてちゃんとした仕事につきたいと願う子どもと、将来自分と似た境遇の子や社会的弱者を救いたいと願う子どもだ。しかし彼らにとって望む職業についたり夢を叶える事は不可能に近いらしい。いや就職すること自体失業率50%を越えるこの国ではとても困難なことだ。この子たちは町に出ても町の人はずみか犬が通っている位にしか思っていないらしい。同じフィリピンの人々が自分より更に貧しい人を軽蔑する。とても悲しいことだ。貧しさは差別も生み出すのか。しかしこの境遇にしながら彼らが笑いを忘れてしまわないのはなぜだろう。日本にこの子たちのような子が何人いるだろう。次の日シャワーを浴び新しい服に着替えた子供たちはやはりいつもと変わらずニコニコ

した。誰だって毎日シャワーを浴びてきれいな着替えがあるほうがいいに決まっている。一人の子と地面に絵を書いて遊んだ。ねずみ、とかげ、傘、電信柱など、その中で彼は大きな家の絵をかいた。それは彼の夢だ。彼の家だ。彼の望みを知ったときだった。そうだ。彼らだってちゃんと家が欲しいんだ。彼らの家ができるときはあるのだろうか。あとで若者の家の子ども達が来て墓地の子を対象にした説明をしてくれた。

少し高台に登ると墓全体が一望できた。雨露をしのぎ、物乞いをし、レストランの残りをアサリ、時にはかっぱらいをして生きていく子ども達。彼らがこの墓を離れる日は来るのだろうか。墓地の中にあったボロボロのキリストの石像を見たとき、神は本当にいるのかとふと思った。

上左 彼は祖母にお金をもらい船に乗りうっかりマニラまでできてしまいそのままストリートチルドレンになった過去をもつ。そのせいか、明るい中でも、どこか、彼の目は少し寂しそうだ。

上右 墓地のこの一人。いい顔だったので一枚パシャッ。

下左 若者の家のスタッフのお姉さん(24)「わたしはここへ来るのが一番好きなの!!」と言っていた。

ニュースモーキーマウンテン(パヤタスのゴミ捨て場)

マニラ首都圏ケソン市パヤタス地区は「ニュースモーキーマウンテン」とも呼ばれるゴミの山が築かれている。写真からもわかるようにかなりの高さだ。しかしさらにすごいことは、この山でゴミをあさって生活する人々がいることだ。スカベンジャー(廃品回収業者)たちは悪臭漂う中もくもくと金目の物をゴミの中から探しては売る生活をしている。

(スモーキーマウンテンについて)

パヤタスのゴミ山を語る前に、まずは古いスモーキーマウンテンの話をしなければならぬだろう。世界最大規模のゴミ捨て場だったスモーキーマウンテンはもとは漁

民が住む海辺の平和な村だったが一九五四年、マニラ市がここにゴミを投棄し始め村は一変した。漁民達はゴミの中から金目の物を採取して業者に売るスカベンジャーになった。マニラ首都圏の人口の急増でにわかにゴミの量は増加していった。メタンガスの発散や廃棄物の自然発火で山のあちらこちらで白い煙がくすぶるようになっていた。これがスモークマウンテンの名前の由来だ。しかしこの山の存在は政府にとって国の恥そのものだった。政府は八二年スモークマウンテンの住民を強制移住させたりしたが、仕事のない人々はまた山に戻ってきてしまった。ラモス大統領は九三年五月一日スモーク閉鎖を宣言、九五年十一月二七日、政府は警官部隊を動員し住民の強制排除に出た。警察官が抵抗する住民に発砲し一人が死亡、日本人カメラマンを含む二十人が負傷した。こうしてスモークマウンテンは閉鎖された。

(ある一家について)

話はパヤタスに戻る。パヤタスのゴミ捨て場は、保険や住民登録されていない人々、いわゆるスクワッター(不法占拠者)たちの集まった場所だった。ドブのようなゴミの中すえたような臭いが漂っていた。病気も多いただろう。ある一家、僕たちが最初に訪れた家は10人兄弟で母さんは妊娠6ヶ月だった。家は4畳半以下の狭い家で隣とカーテン一枚で隔ててあるだけ、しかも仮住まいだ。若者の家のジェフィット君はこの家から一家全員が十分に食べていけないため引きとられたらしい。一緒に暮らせない子が何人かいるようだ。この家の父さんはマニラ市内の大学の校内の清掃をしている。1ヵ月7千ペソ。米1キロ買うのに20ペソかかる。しかし外にコンクリート塀を作るのに仕事先から7千ペソ借金し、利子が月600ペソ。家賃だってあるだろう。父さんは毎日4時に起き4時間自転車をこいで朝8時~夕方4時まで仕事をして8時に帰ってくるそうだ。ジブニーという車に乗るとお金がかかるからだそうだ。しかしこの家は仕事をもつだけ運がいいのだそうだ。他の収入は1日ゴミをあさって平均100ペソ。他に大きくなった子が機械の修理をして家計を助けている。しかし本当にひどい家だった。雨の日は雨漏りするのでみんな壁に寄りかかって眠るそうだ。本当に相当不便な生活だと思う。なぜ彼らはこんな生活をしなければならないのか。なぜ彼らはここに暮らさなければいけないのか。貧しいから。ではなぜ貧しいのか。僕たちもけっして関係なくはないと思う。ゴミの山を見るとそう思う。

かわいい末っ子だがこの子も大きくなればゴミを拾う生活をしなければいけないのだろうか

(アイリーンについて)

ぼく達は次にアイリーンという少女取材した。ちょっと見ると男の子っぽいけど、次が彼女に聞いたことである。

アイリーン・14歳 女6人男4人の10人兄弟
生まれた場所 マルキーノ 一番大切なもの 家族

- 何をするのが好き？
コンピューターの操作（隣の人に借りて使っている）
- いつからスモークマウンテンにいるか？
二年前から
- どこかへ行きたいと思ったことはあるか？
働く時間が必要なのでどこかへ行きたいと思ったことはない
- ゴミの山をどう思うか？
生きていく上でなくてはならない山
- 何か欲しいものは？
とくになし

夢は学校を卒業することで卒業してちゃんとした職につき家を助けてこの生活から抜け出したいと思っている。彼女の望みはかなうのだろうか。それとも……。彼女は自分のことより家族のこと。「あれが欲しい」「どこかへ行きたい」という欲求も抱かない。何が彼女をこうしたんだろう。ただ健気で片付けられない。彼女は彼女の宝物のために働き生きることによって一生懸命なのだ。

彼女の日課

朝6時にゴミの山へ。お昼はファーストフードの残りをゴミ捨て場からさがして食べる。食べ物もゴミの山から得ているのだ。夜6時まで働いている。

彼女の家族

父母についてはわからないが姉がお店をきりもりし他の兄弟は他の家へお手伝いに行っている。

ゴミを売ると？

ダンボール1kg 1ペソ
ペットボトル1kg 5ペソ
ガラスびん1本 5ペソ
プラスチック1kg 5ペソ
空き缶1kg 1ペソ

アイリーンはいつも1日平均100ペソ多くて300ペソ。
かなりのゴミをとらなければならないようだ。

2000年7月10日に崩れ、周辺の住民200人以上が生き埋めになったこのパタ

ヤスのゴミの山。まだ多くの死体は発見されておらず、このゴミの山はたくさんの死者の眠る山でもある。そのような危険があっても、人々はゴミの山で生活している。ゴミの山に直接家を作っているものもいる。考えてみると、彼らはつねに死ととなりあわせなのかもしれない。だから生きて行くのかも。わからない。

すさまじい悪臭の中でも、子ども達は笑顔を見せてくれる。カメラを向けるとニコッとこっちを向いてくれた。取り終って「ありがとう」と言うと手をあわせて「ありがとう」と笑いながら返してきたのでこちらもあわせて「ありがとう」と返すとまたむこうも返してきたので長いことお礼の言い合いが続いた。ちなみに彼らの家のすぐそばにゴミの山はそびえたっていた。

ここの集落の大部分はスクワッター達だろう。スクワッター達だろう。スクワッター達はゴミの山にかぎらず、線路のすぐそばや川べりなどに住んでいる。(左の写真はたぶんその一例)パタヤスのゴミ捨て場は、一度閉鎖されたにもかかわらず、かれらはまたすぐに舞いもどってきてしまう。かれらの生活をおおう貧しさをなくさなければ、山から人は、はなれないだろう。しかし、貧しさはどうすればなくせるだろう。

ゴミの山の少女アイリーン(14)

最初あったときは男の子かと思った。この写真を見れば彼女はふつうの女の子にしか見えないし、まして毎日ゴミの山に登ってるなんて想像できない。ただ彼女が学校にも行かずに家族のために、あの悪臭の中ゴミをひろう生活をつづけているのはまぎれもない事実。無理もないことだが、彼女は自分がゴミの山で働いていることをはずかしがっている。

パタヤスのゴミの山を流れる川

コーラのような茶色で、やはりすごい悪臭がしていた。この川はいったいどこへ流れていくんだろう。山はメタンガスの発散などで地域に大気汚染をもたらしている。こんなところをぬけだしたいと思うのは当然だろう。彼らだってけっして好きでゴミの山にいるわけではないと思う。

学校へ行くジプシー(乗り合いバス)での一シーン。みんないきいきした顔をしている。子ども達の多くが学校へ行きたくても行けない子どもばかりだったからにちがいない。彼らは学校に行くまでハシャギどうしだが、いざそれぞれのクラスにいき授業を受けると、ぼくたちに向かってニコニコ手をふってくるけど、かなり真面目に授業を受けている。授業がつまらないと思ったことはないのだろうか。

ぼくは今回の旅行でたくさんの人にあった。町のいたる所にあるスラムの人達。あらゆる所に住むスクワッターや、ゴミとともに生きるスカベンジャー。

親もなくあるいはいても虐待を受けたり家族とはなればなれになった子ども達。墓地でぼくに家の絵をかいてくれたあの子。船でマニラまで流れついてしまったあの子。墓をふみこえて行ったあの子。

若者の家のあかるい子ども達と彼らとともに生きる人達。

ゴミの山のあの家族とゴミの山で働き続けるあの子。そしてその他たくさんの人々

とぼくは出会った。フィリピンの政府は国のイメージをよくしたいばかりに海やその他もときれいなところを観光客に見せようとしているらしい。しかし、ぼくは観光客として来ていたらフィリピンからそれほど感じるものはなかったと思う。フィリピンで出会った人達や、ゴミの山を登ったりする経験は何かいろいろなものを感じられたような気がする。

それと、あまりにフィリピンを知らなさすぎたと思う。フィリピンといえばバナナしか思いうかばなかったし。

スモークマウンテンなんか知りもしなかった。はずかしい。日本がフィリピンでアメリカ軍に負けたことも、日本軍がフィリピンの人達にしたことも、マニラの教会にある日本軍に殺されたフィリピン人の捕虜の慰霊碑を見るまで全然忘れていた。とてもなさない。

ストリートチルドレンという言葉は知っていたが、彼らについては、なにも考えたことがなかった。実際に彼らと接してみて日本のぼくらは欲求をつねに満たされ夢ももて、とてもめぐまれている。でもその陰に彼らがいることを忘れてはいけない。

常に笑顔を忘れない子ども達、明るいかげにどことなく悲しげなものを感じさせる子ども達、親もいない子ども達、すさまじい環境を生きていく子ども達、たくさんの環境を生きていく子ども達。たくさんの子どもがいたけど、みんな望みを持ちちゃんと生きてたような気がする。

「ぼくにとって今、一番大切なことはなにか。」「ぼく達はどう生きるか。」「生きることはどういうことか」

たくさんの疑問が残った。とにかく今回のフィリピンの旅はぼくが生きていくうえで大切なものになったような気がする。

長々と、カッコいいことを言ってたけどぼくも実際に何を理解したかということ、それはあまりよくわからない。でも今度からは口でなにか言ったり、ただ見てるだけでなく、なにか行動に移せるようになりたい。すくなくとも何ができるか考えたいと思う。

フィリピンにかぎらず世界のあちこちにストリートチルドレンはいる。かれらがぼくらのように、学校に行くことができ、ちゃんとした家に住み働かずに生活でき、夢をかなえることができる日が来るだろうか。

ぼくはまたフィリピンに訪れたい。また若者の家の門の前に立ちたいと思っている。

2002年 夏休み友情のレポーター 山本 周平